



言大  
葉和  
風俗  
誹人  
氣質



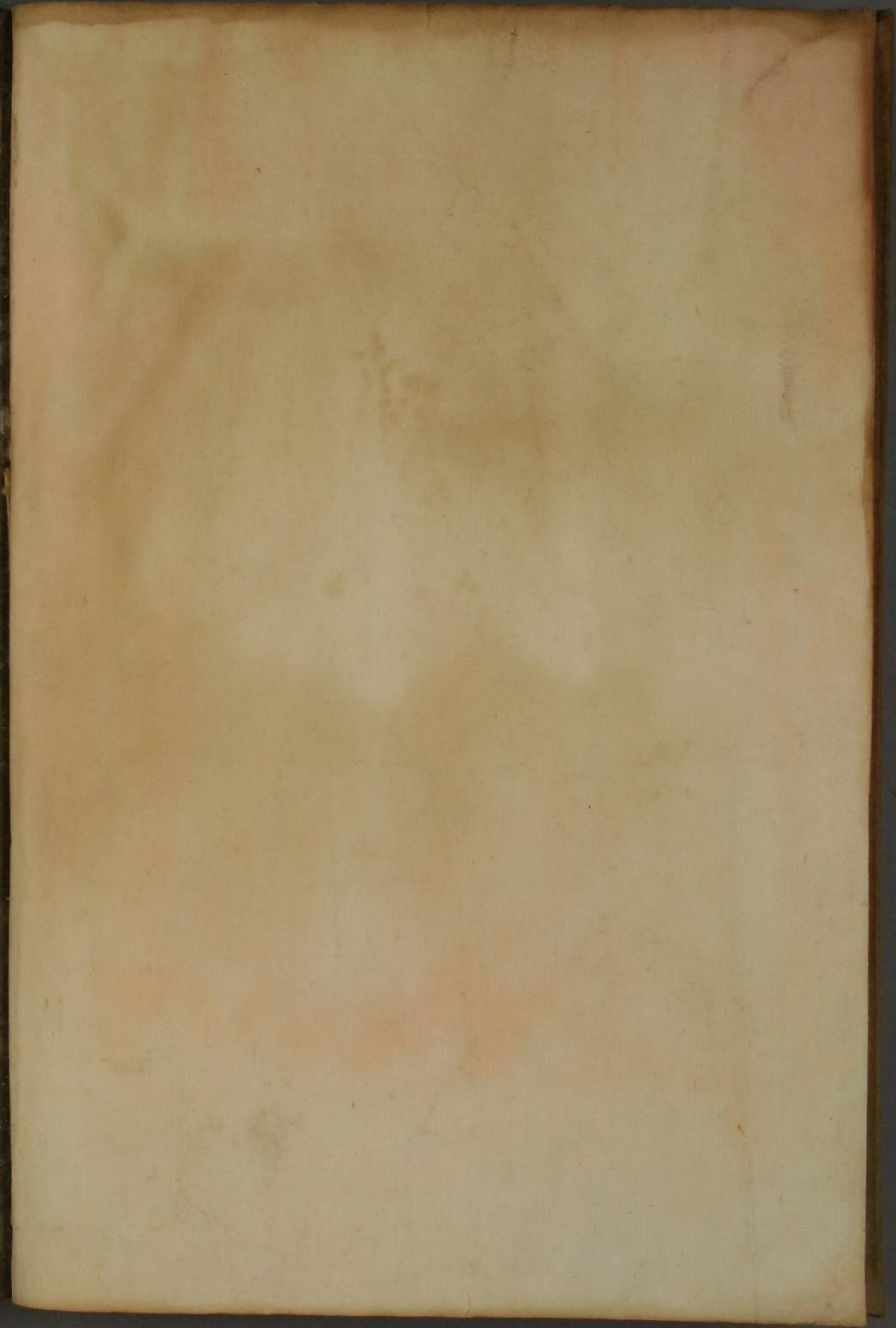
子部



三



遠  
1620





東洋遊人客談と題号していふを  
沖江の海客遊人といふ海客といふ  
こと知事先達ていふこと

享曆十三未果初春

作者 若作 龜友



風俗雜人氣質



一之卷

目録

第一 浪持の大意程浪持の今接義

和書の目録のび主従  
身代義書の清系  
心算の大切を海客語取  
其書始りの能い男

第二 主人の名代山言見と酒事二首

夜物思名玉もものも祐象の  
估物小おほはる所の益

申が子苗をぬきれたはを  
按摩此見登

酒持のたま根のほい今様茶後

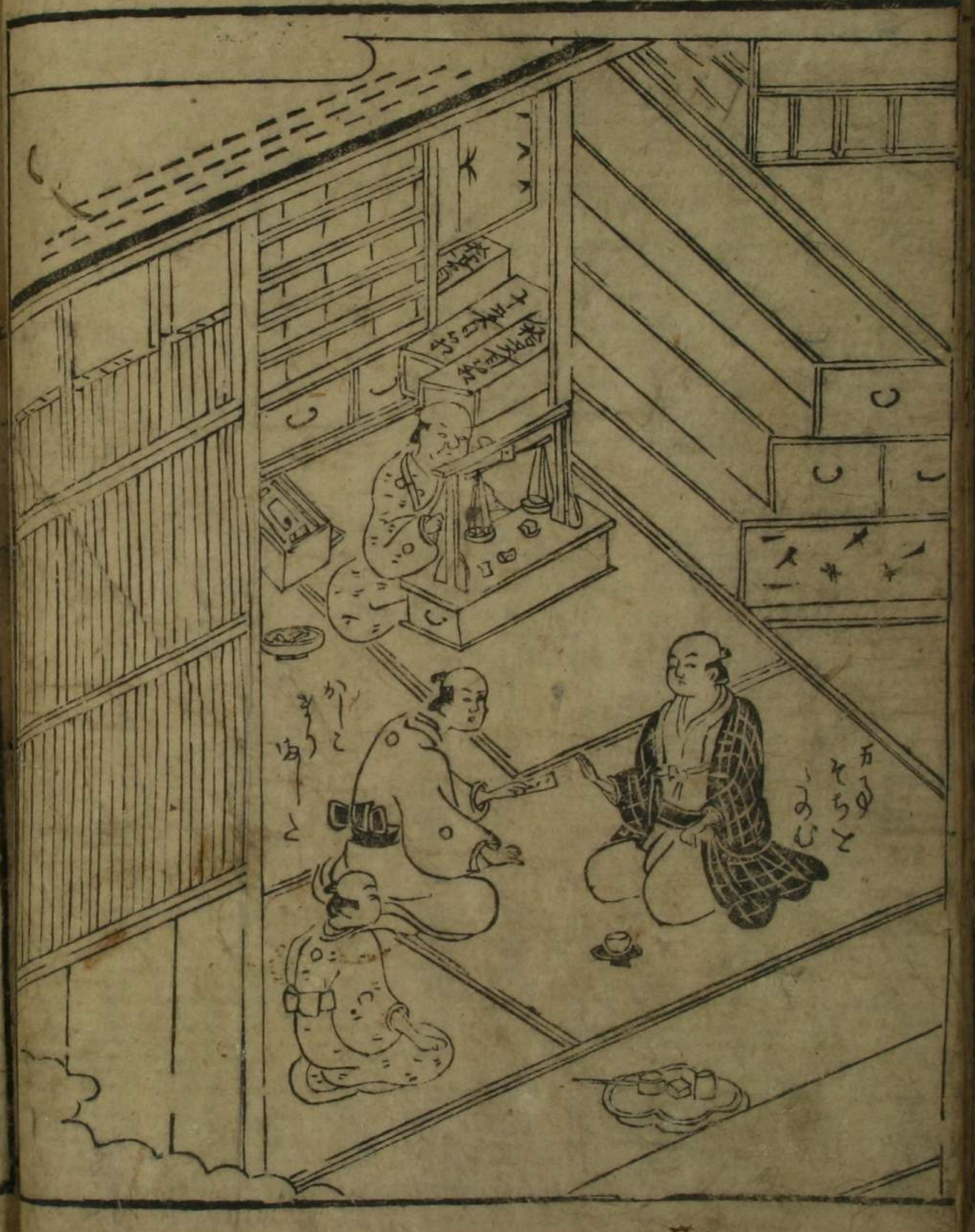
伊海ももあつらるる今世神代小春海可き事とひんを  
目此神の礼とたたらん掃除して神代と敬事とひん哉  
後とといのる事と事なる世界の太平の治はるうふ  
よりやとつられし後六のあんま事もたつめいし  
て春城あるまをけ先聖の礼格とさるぬれまは海世  
つととの合取お意とまをぬとありを七祐徳とあり  
事小のつんそんとまをさるふた今時を極むの  
油葉の細とちやあとい先自うき世に人の後徳と  
子けいなるちがい先が海のせふ捨き人といま  
智大平家徳後をらふ酒儀の系祐事とまはあ  
今年平ありしとて年次をさるる人物にて

































やうく極て大坂の城をさすなりとてわりの由く河津討つてあすのあすも  
やうく此の城をさすはた今橋の目録なりと人も又さすの果て死なれりて  
今ていふ所も親類ともあらずを思ひいふ形も人知れぬふりもあつて  
下より中を宗道なるかむはつてとてとて宗道の名もあつたものの死  
とていふはたあつたやうにせうり山一丹治もあつたやうに人を知る  
た切つていふやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
りるやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
あるやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
かたはら宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
かたはら宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
橋の御人なるにいつていふやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに

ちと胸はたさすやうにあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
他文の方へはつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに  
宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに宗道の名もあつたやうに













二申う前持のけまらる中在お後をてあしめたりはまきもいふ  
 一七部おとほして他をまらば候あてあまら支死のたまふ  
 家の王女光多の年と持たはるは坊あてを年の八月ふるに  
 野二月年八歳の御あてて火一う根つまのにははれ候まも  
 かの御あてらうは御あてをまらうはうわんをま上のまも  
 持家小御あてをまもま持家は思ひその御あてに御あて  
 一に二月おらう事と述懐つて夜に火とあてを御あてに御あて  
 小うまあてのひの御あてをて御あてを御あてに御あて  
 らに御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 ああをまもしては御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 出たりは御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 守をまも御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて

今千敷山切小まを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 ていふとて一尺せまの御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 らとまの御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 小大けの御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 つおあてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 又御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 これ御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 てまら又いけごあてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 せらとて御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 の御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 たりと御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて  
 あは御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あてを御あて

和入書二

十

痛らばとも世のいづれやどほ申もこれのせとあると業紙と  
 志すて人言ひも言ふ事さういとも出づりこれの氣樂なすにこれ  
 ある是即 西廊の樂のありと流文を指さすところのせんは  
 ましたぬおけりてお付の存事を記さるるにまるともせりて我  
 ありてともたはむある者もなきに計あらねりて自ら備せんと  
 といふは字の中へは何の勢の字氣とありて又その年の念ふたのま  
 小美宅人の小言相成とありて本意同く月見れ有少の信を要す  
 先人言ひ、酒小新番おのては酒の利とく。月二言指月はておま  
 高貴とてせしめたるはたけなき様おしまるるお付のあらは年家  
 此合子納はれぬ一年のせまにけぬ樂はせしめたるまじせし業  
 久米小まよりまると能くおせぬは久米にせしめてせぬとれ  
 是業をあらくの樂は流りまははむとておるはともお同推し

中ふふいまるか人壽も徹切て先月令三拾五はあせりて流りてはこれ  
 是れが刑殺中てもいざいざと樂には及存念の事世れいそま出あ  
 小折るあらも大極に中末あはは世の縁もあまいと極めはと極め  
 上りまるといふとていざいざのたが世程をいそもいそまの事  
 とそ花とともいそま下一族の友と共極をいあらはれは業のやと  
 世の中へ八年やとふふ流にはもまをいあらはれは業のやと  
 無能なるかかつとて悦びきり我くか才の上世にせんかたつと極  
 ありて極程の事やと極程の事やといふとていあらはれは業の  
 けりてたの極程の事やと極程の事やといふとていあらはれは業の  
 門はそ凡馬の事かたつとて悦びきり我くか才の上世にせんかたつと極  
 ありて極程の事やと極程の事やといふとていあらはれは業の  
 かのくおんまの極程の事やと極程の事やといふとていあらはれは業の  
 との、是れは極程の事やと極程の事やといふとていあらはれは業の

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、

水



水









直に...  
 小の...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

風俗雜人...

# 風俗雜人氣質

三三卷

## 目録

第一 子天の...

...  
 ...  
 ...

第二 柳村...

...  
 ...  
 ...



第三 木下時徳を以て徳妻の元上見

此之が福余の昔日やうに  
出〜〜大あり

おたのしむ遊座とん号那人の宿遠入

かやもともおほはるのれあの日夕暮小なる山にるあふ古きおひ  
とつらとらあやめなれおのたのまきしこも木下時徳を以て徳妻を  
奈々の新向にれてふも〜〜木下時徳の方へおれおのたのまきし  
あおれんともおほはるのれあの日夕暮小なる山にるあふ古きおひ  
あ(由也) ぶか新カそののたのまきしこも木下時徳を以て徳妻を  
ち氣おけ海に二階(何)も木下時徳の方へおれおのたのまきし  
うらまして之を徳妻とておのたのまきしこも木下時徳の方へおれ  
徳(何)も木下時徳の方へおれおのたのまきしこも木下時徳の方へおれ  
まよも木下時徳の方へおれおのたのまきしこも木下時徳の方へおれ  
のりい小ねも木下時徳の方へおれおのたのまきしこも木下時徳の方へおれ  
木下時徳の方へおれおのたのまきしこも木下時徳の方へおれ









わすれず諸君あそばさるべし...  
のりふふ人のまへちうと之をたの借さ...  
せりや中座おちりけり又まのわはほ...  
おきかいた播道先まじりん...  
まをれおけとりて高をさし...  
とらふ入座とたまふはんと...  
死すもつやと入光ふ...  
そのふらとて...  
ふとのかり...  
まのものは...  
しるいふ...  
あてもいふ...

至りたり...  
かものり...  
れおき...  
は子と...  
ほま...  
せり...  
よい...  
のら...  
ま...  
中...  
ころ...  
勤...















西の山に雲がたるとして、  
 舟の人の心もなほなほと  
 今更なるはなはなと  
 と留別とありて、  
 今更なるはなはなと  
 と留別とありて、

風俗雜人氣質卷之二

風俗雜人氣質



四五卷

目錄

第一 徳元馬河の原目之村の暮湯

牛の半法馬河の原目之村の暮湯  
 辺人と河原の酒客  
 珠の糸物なるはなはなと  
 夢の遊踏の足跡



第二

徳安の飛ぶあつてはつて夫れ高き山

名のそしはあつても三日ハ

足さむける老の備居

報の流りて候くは木の

といふ道のはか

徳安の飛ぶあつてはつて夫れ高き山

あつても三日ハ足さむける老の備居

報の流りて候くは木の

といふ道のはか

徳安の飛ぶあつてはつて夫れ高き山

あつても三日ハ足さむける老の備居

報の流りて候くは木の

といふ道のはか

徳安の飛ぶあつてはつて夫れ高き山

あつても三日ハ足さむける老の備居

報の流りて候くは木の

徳安の飛ぶあつてはつて夫れ高き山

あつても三日ハ

のまゝの湯に入れば、湯舟のかくり親をききて小湯舟にはほしか  
 ちあがるよめでや一のじの板あさかの駕の火と杉竹の板は  
 と深まじお暮湯でまるお足と何れにせよせと湯舟よりみ  
 ら小樽のいちちとぬらとせよとさる湯舟の信教原をいこ  
 と供まもるもやるく愛をたかむ日におりしてこもせせむかの  
 らのま宿うのまこしおけいふころち者宿うのま宿うのま  
 まらせふおの湯舟のるるしゆして病氣はま相もよあうこ  
 ぬえんの杖しうらたまふちをたしうと舞あぐりての遊境もす  
 あまわくもはほあまぶらうりや涙ととふるこそ聖日受  
 湯とんでおお急の度の湯え方とそ大湯舟小湯舟は付川  
 名清のていゆり乃葉田中てや人のえん小生うのこお  
 せりくるものおのやういなる信教原とまらふは湯舟のり

清の親にうまると思ふちのおでこと一身小せり系はほひ  
 むけ思ふるぞらるものゆゑをうけく相あてよとくは  
 小湯とともわけわづら五音原海なるるあまのゆゑ  
 上り人なるりゆゑ信教原おあはらうのりたしては人のお  
 信でそれらにまをあるまはうこのものあてゆゑまはる主人は  
 れいにまをたけひは出づ見えおあうのあまのあ湯うけあり及  
 ちあつ湯舟は命もあはれまをゆゑあまのあ湯うけてあり及  
 おゆこころにせらうあつらゆゑあまのあ湯うけてあり及  
 戸あつらまをい湯舟うてあまのあ湯うけてあり及  
 ちあまのあ湯うけてあまのあ湯うけてあり及  
 ちあまのあ湯うけてあまのあ湯うけてあり及  
 ちあまのあ湯うけてあまのあ湯うけてあり及  
 ちあまのあ湯うけてあまのあ湯うけてあり及

井ノ入



かりん原ありあはるは金中ありまたあらむ大坂のあまやゆて  
 高野のこいせ好まらふあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 戸宿夜よてあまやゆちあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 年お出下されまらふ又高野のこいせ好まらふあはるはひらけぬらふ  
 早も人のほてのあいせあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 さりまらふらひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 ませしあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 伴と松の福の種のかみらふあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 ませしあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 しあせお供のつらふはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 ともせあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 るとあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと

それかりん原ありあはるは金中ありまたあらむ大坂のあまやゆて  
 とらふはあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 中にお供のつらふはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 おらふはあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 のあつとあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 あく同宿よてあまやゆちあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 早も人のほてのあいせあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 ませしあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 さりまらふらひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 ませしあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 伴と松の福の種のかみらふあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 ませしあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 しあせお供のつらふはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 ともせあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと  
 るとあはるはひらけぬらふしあつ陽のあつと

外入巻  
 二







此のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
まをよと一はせやくの海にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
進みながらたれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
しんとして世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
うまもたれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ

徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
うまもたれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
しんとして世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
うまもたれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ

徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
うまもたれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
しんとして世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
うまもたれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ  
徳のちがれ神出で世にぞあるは世にぞあるの徳のちがれ神出でよ









第二 地は城隍廟を中とし海邊の河原の

善き夢の碇を角一 祈り奉る

さる川原の月見

名陽は梅一 さらなる佛光

茶師は其

お宿の能人の知恵は流し舟を舟とて山道

音の中うとゆ ちぢんせ度とて駈走をたすれぬのなほ大阪は江色  
よめたてとりて 横面とてめ 今月のこのよきもすれもすれもすれもすれ  
まぬらるゝと小舟もすれと切れてもすれもすれもすれもすれもすれ  
枝小舟をさし 割れどしとおうけをなげんまぬてそ日もすれもすれもすれ  
まのさ通と入風をそよぶとすれもすれもすれもすれもすれもすれもすれ  
あせもすれもすれもすれもすれもすれもすれもすれもすれもすれもすれ  
よの儀者かのは国乃のほぬともてり人たててあつたつとあつたつとあつたつ  
まもてり人たててあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと  
るまもてり人たててあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつ  
しあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあ  
はつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあ

井ノ邊の



つゝあつてはるを清く正持ありとせんせしむりたればはるのお侍が殿の  
その地持おて玉印を御持とて金金ととりせしむるにたゞはるの  
侍はかくも利まらんがゆへに向より金金ととりせしむるにたゞはるの  
まを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに向より金金と  
とあり侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
てのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに向より  
大坂に因りて侍を御持とて金金ととりせしむるにたゞはるの  
てお侍のまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
とあり侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
手おしむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに向より  
はる侍も侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに向より

今もまたのせりぬめくはるるをそとて侍の侍金とて侍の侍金とて侍の侍金  
してはるのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
はる侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
とあり侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
手おしむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに向より  
はる侍も侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに  
侍りのまを付しむるにたゞはるの侍はかくも利まらんがゆへに向より

解









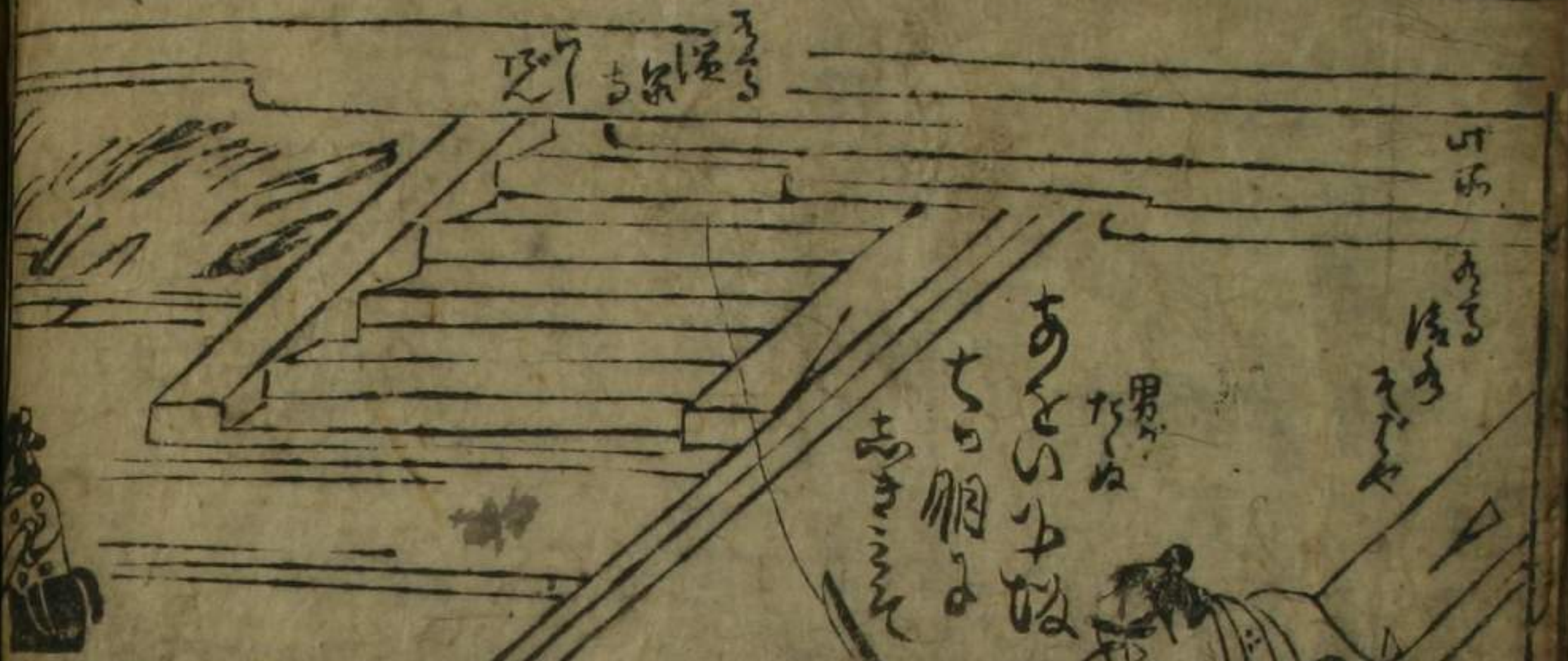




らんたを佳敷屋まで何あるのよあぬのものから思はれませふ  
はぬるわ候申せし補山法もお説きお聞かざるにや  
せふ大なるお徳もあらずお徳のほどと先世の徳もあはれ  
しん家へついでいあらうといふ事お聞き入敷しよぬ  
光に指さす事申すはまの御事なりと申すことなり  
あらわれお祈りするなりあらう申すことなり  
まにまに入敷しよぬ事お聞き入敷しよぬ  
ふふお徳もあらずお徳のほどと先世の徳もあはれ  
まにまに入敷しよぬ事お聞き入敷しよぬ  
ふふお徳もあらずお徳のほどと先世の徳もあはれ  
まにまに入敷しよぬ事お聞き入敷しよぬ

ぬんこりいよとにらつとにらつとにらつとにらつとにらつとにらつと  
一室をいよとにらつとにらつとにらつとにらつとにらつとにらつと  
ふふお徳もあらずお徳のほどと先世の徳もあはれ  
まにまに入敷しよぬ事お聞き入敷しよぬ  
ふふお徳もあらずお徳のほどと先世の徳もあはれ  
まにまに入敷しよぬ事お聞き入敷しよぬ











七つと訪らるるがや人のことかあるあつて尋ねて  
 なる程のやうな事なるといふは油もゆき粉もゆき  
 ておやつめいさういふあつておやつめいさういふ  
 うおまうまういふおまうまういふおまうまういふ  
 子りねがと足尻をせつとつたきかたあつておまう  
 ありのぼく、あつた板のてつりこつておまういふ  
 あり、おまういふの所おまういふとつたきかたあつて  
 風流能くおまういふとつたきかたあつて

官曆十三松山守吉日

東二条を返つたあつて



野田板



